

史遊サロンの通信

No 263号
平成30年
3月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

平昌冬季オリンピック

「躁鬱症」を病んでひとり暮らしの十三歳年下の弟がいる。このところ快方に向かつていて、日常生活ではほとんど問題がないが、社会生活の面では孤立しているの、毎日メールを送って、様子を確かめている。

その返信の大部分は、空メールであるが、オリンピックの期間中、女子カーリングの試合が共通の話題となっていた。先日会った時に、カーリングという単純であるが「作戦」が複雑なゲームのことが話題になり、少なくとも私の理解より正確なので感心したところ、それから、いろいろと解説をつけてメールを送ってくる。いわばふたりだけの世界であったが、女子カーリングに嵌っていた。最初は漠然と見て応援しているだけであったが、結構気になることがあった。寒い地域で盛んなスポーツなので、男女とも、北欧系すなわち、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイ、ロシア、イギリス(スコットランド)

等が強い。大寫しになると髪の毛や眼の色も良く判る。これら北欧系諸国は、金髪・碧眼の中心地域である。

ところが、結構、濃い栗髪や、東洋系と見まがうほどの黒髪選手もいる。そこでインターネットで有名選手の写真を調べてみた。多くは美人選手として紹介されているのであるが、スウェーデンもロシアも顔立ちが白人系なのに、その半数が黒髪または濃い栗髪である。なかには金髪ベースなのに長く伸びた毛の部分だけ黒髪の選手や、その逆の選手もいる。染めているのであろうか。

しかし、どうやら北欧中心部はみんな金髪と思ひ混んでいたのが間違えらしい。調べてみると、金髪は劣勢遺伝、栗髪が優性遺伝で、金髪は世界中で一・七パーセントしかないのだそう。

英国チームの代表イブ・ミアヘッド(スコットランド)もソチのオリンピックの時か

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の三月十七日です。会場は定例の銀座ルノール八重洲北口会議室。
なお、五月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の五月十九日です。
「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

ら美人選手として知られていたが、右半分が金髪でその他は黒髪である。

日本と英国の銅メダル決定戦の時、日本のスキッパー藤沢五月のラストショットがわずかに狂い、敗戦を覚悟した瞬間があった。

しかし藤沢の一投は後に「悪女の誘惑」と言われる微妙な形を作っていた。普通なら、英国がここで一点を得て同点とし、延長に臨むのが常道であったが、「誘惑」に誘われて、イブ・ミアヘッドは自ら二点を取ってここで試合を一気に決める強硬策をとった。

それは専門家によるとミアヘッドなら極めて高い確率で決められるはずであった。ところが、これが痛恨のミスとなり日本の勝利となってしまった。彼女の黒髪部分が日本に銅メダルを恵んでくれたのかも知れない。

かくして冬季オリンピックとともに、弟との楽しかった交換メールも終わった。

(新井宏)

藤沢周平の『蟬しぐれ』再読

諸橋 奏

時代小説作家藤沢周平は昭和二年(一九二七)十二月二十六日。山形県東田川郡黄金村大字高坂字楯ノ下一〇三(現・鶴岡市)に、父小菅繁蔵・母たきゑ(農業)の次男として生まれた。兄弟は姉二人と兄で、後に妹と弟が生。

代表作の一つ『蟬しぐれ』の初出は「秋田魁新報」昭和六十一年(一九八六)六月三十日より連載で、その単行本は昭和六十三年五月文藝春秋刊。また後日、巷間でサラリーマン必読三部作と評される『風の果て』の単行本は昭和六十年一月朝日新聞社刊。『三屋清左衛門残日録』の単行本は平成元年(一九八九)九月文藝春秋刊。

『蟬しぐれ』は作者五十九歳(昭和六十二年連載完)の作品。三部作が文春文庫で出揃ったのは、平成四年九月『三屋清左衛門残日録』が出版された時で私は六十歳、サラリーマン生活も終りに近い頃、この文庫本で三部作に接した。

昭和が六十四年(一九八九)一月七日で終わった時、藤沢六十一歳。三部作は自分自身の昭和史の集大成的作品でもあったであろう。

因みに『日本の歴史総括年表』(週刊朝日)と『藤沢周年年表』(朝日ビジュアルシリーズ)から昭和の主なる動きと藤沢の関係作品年表とを抜萃付記すると

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------------------------|------------------------|-------------------|-----------------|---------------------|--------------------|------------------------------------|-----------------|--|-----------------|-----------------|-------------------------|--------------------|--|-------------------|-----------------|-----------------------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|----------------------|
| 1926 (大正15・昭和元) | 1927 (昭和2) 0歳 | 3月、金融恐慌 (藤沢周平誕生 12・26) | 1931 (昭和6) 4歳 | 9月、満州事変はじまる | 1932 (昭和7) 5歳 | 3月、満州国建国 5月、五・一五事件 | 1936 (昭和11) 9歳 | 2月、二・二六事件 | 1937 (昭和12) 10歳 | 7月、日中戦争はじまる | 1941 (昭和16) 14歳 | 12月、英米に宣戦布告(太平洋戦争 12・8) | 1945 (昭和20) 18歳 | 8月、広島に原爆(6日)長崎に原爆(9日)ポツダム宣言受諾決定(14日) (敗戦 8・15) | 1946 (昭和21) 19歳 | 11月、日本国憲法公布 | | | | | |
| 1949 (昭和24) 22歳 | (3月、山形師範学校卒業。4月、湯田川中学校へ赴任。) | 1950 (昭和25) 23歳 | 6月、朝鮮戦争はじまる(6・25) | 1951 (昭和26) 24歳 | (3月、肺結核が発見され入院、療養。) | 1952 (昭和27) 25歳 | 4月、対日平和・日米安保両条約が発効 (日本、主権を回復 4・28) | 1953 (昭和28) 26歳 | (2月、上京。東京都北多摩郡東村山町(現・東村山市恩田町)篠田病院に入院。手術、療養。) | 1956 (昭和31) 29歳 | 12月 国連加盟 | 1957 (昭和32) 30歳 | (11月退院、練馬区貫井町に居住。) | 1959 (昭和34) 32歳 | (8月、鶴岡市の三浦悦子と結婚。) | 1960 (昭和35) 33歳 | 6月、新安保条約自然承認 (日本食品経済社に入社) 49年退社。) | 1963 (昭和38) 36歳 | (2月、展子生まれる。10月、悦子死去。) | 1969 (昭和44) 42歳 | (1月、江戸川区小岩の高沢和子と再婚。) |

1973(昭和48)46歳

(7月17日、『暗殺の年輪』が第69回直木賞受賞。)

1975(昭和50)48歳

(『義民が駆ける』『歴史と人物』八月号より連載。)

1976(昭和51)49歳

(11月、練馬区大泉学園町に転居。)

1980(昭和55)53歳

(『密謀』『毎日新聞』夕刊九月十六日より連載。)

1983(昭和58)56歳

(『風の果て』『週刊朝日』十月十四日号より連載。)

1985(昭和60)58歳

(『三屋清左衛門残日録』『別冊文藝春秋』一七二号より連載。)

1986(昭和61)59歳

(『蟬しぐれ』『秋田魁新報』六月三十日より連載。)

1989(昭和64・平成元)62歳

1月、昭和天皇没(1・7)、平成と改元

天安門事件 ベルリンの壁崩壊

この激変の昭和が藤沢作品の背景にあった

が、藤沢の場合は更に、肺結核で二十六年三

月(二十四歳)から二十八年二月まで鶴岡で療

養、三十二年十一月(三十歳)まで、都下の前

記篠田病院での入院療養生活であった。

退院後は就職して東京居住となり、練馬区

貫井町、北多摩郡久留米町(現・東久留米市

金山町)等を経て、終の住処は練馬区大泉学園町であった。

偶西武沿線に土地勘をもつ私にとって藤沢は関心のある作家であったが、加えて藤沢の生育地、庄内鶴岡と私の郷里長岡とは「日本海側気候」「城下町」「隣接して酒田港・新潟港」などの共通点があり、そこで育まれた文化や気質・感性を理解できることは想像に難くなく、藤沢もまた両藩の關係に少なからず関心を持っていたことがその作品から伺い知ることが出来る。

『密謀』は関ヶ原の合戦を描いた歴史長編で、その中心人物は上杉景勝重臣・智将直江兼続。その扱城与板城は、新潟県三島郡与板町与板(現・長岡市与板町与板)であり、藤沢の連載最後の『漆の実のみる国』米沢藩主上杉鷹山を描いた作品へと続いていく。

また、『義民が駆ける』は庄内藩酒井家と長岡藩牧野家とが共に係り合った事件「三方領地替え」を取り扱った作品。

改めて三部作の代表『蟬しぐれ』を帯文から抜萃概説すると

主人公牧文四郎十五歳(後の郡奉行・襲名牧助左衛門)は、「朝、川のほとりで蛇に咬まれた隣家の娘(小柳ふく十二歳、後の藩主寵愛の側妾お福さま)をすくう場面からはじま

る物語。舞台は海坂藩(鶴岡がモデルと…)。清流と木立に囲まれた城下組屋敷。淡い恋、友情、悲運と忍苦。ひとりの少年藩士が成長

してゆく姿を描いた作品」(解説・秋山駿) 当作品の諸論評には「完璧な純愛小説」(縄田一男)、「新しい時代小説」(秋山駿)、「優れた青春小説でもあり、教養小説の王道を行く作品」(田名部昭)など多数が……。

ただ藤沢はこの作品について「連載中面白くならず、書くのが苦痛であったが、一冊の本になってから自分でも少しは読みごたえがある小説になっていて意外だった」との告白を残している(田名部昭)。

作者が伝えたいことはもつと他にあったということであろうか。

藤沢はこの小説を通して、めざましい科学・技術の進歩が機械論的に行き過ぎ、われわれの社会全体が抱える諸々の危機をもたらしている激動の世界の流れに対し、時代が変わっても変わらない大切なもの「情義」という「人のふみ行うべき正しい道」があるはずであり、事実「昭和」の日本には色濃く残っていたとのメッセージを『蟬しぐれ』に託して「平成・日本」「二十一世紀・世界」に発信したのでは……、私の独り善がりであろうか。

ところで、そのメッセージを受けた平成も、三十一年(二〇一九)四月三十日に天皇の退位と決定(平成二十九年十二月八日閣議)平成は三十年四ヶ月で幕を下ろすこととなる。平成二十九年はたまたま藤沢没後二十年、六十歳で『蟬しぐれ』初見の私もあつという間の八十五歳老。その老境に再読を促したのは藤沢の『蟬しぐれ』が「一冊の本になってから読みごたえのある小説になっていて意外だった」との文言が引掛かっていたからである。

改めて文庫版『蟬しぐれ』を手にした。

書き出し「朝の蛇」は、組屋敷裏、澄んだ小川の流れ、ひろい田圃……の風景。少年牧文四郎は、にいにいぜみの鳴いている朝の光の中、小川で顔を洗い、身体をぬぐっていたその時突然の悲鳴が。隣家の少女、小柳のふくが蛇に噛まれたのだ。とっさにかけてきた文四郎はふくの指を口にふくみ、傷口の血を吸って救げるところからはじまる。

舞台となる穏やかな自然こそは「日本民族の形成以来、目に見えないカミの働きとして崇拜してきた『かんながら惟神の道』」でありその自然の中で、文四郎は無心に「みそぎ禊」をして心身を清めていたところ、「カミの使いのへび」が現われ、幼なじみの二人は運命的「血

盟の約束」を結ぶ。この早朝の情景が実は当小説の構成の全てを暗示していたのである。

続く「夜祭り」も作者は意図があつての小見出しであつたであろう。神社は日本固有の神道のカミをまつるところで、「カミまつり」は「はらえ禊・祓」と共に神道の最も重要な儀礼であり、カミは自然であり、自然は情である。

しかし全く突然に二人は過酷な「黒風白雨」の人生に直面することとなる。文四郎の敬愛する養父・助左衛門が藩内の世継ぎ争いに連座「私の欲ではなく、義のために」切腹を命じられる。遺体をひく文四郎の重い車に駆けて来たふくは「文四郎によりそつて(中略)一心な力をこめて梶棒をひいていた」。情・義の日本的世界観ではじまるこの作品は更に慈悲という東洋的世界観へと展開していく。若い二人は不条理な運命の「闇を闘う」こととなる。

「人間苦の世界」との戦い。が、文四郎には幸いなことに打ち込むことが。昼間は私塾で中国の聖賢の述作「経書」を学び、昼過ぎからは一刀流道場に通う日常があり、二人の親友にも恵まれ、不遇感を振り払うべく修行に励む。

そして石栗道場空鈍流の秘剣「村雨」を伝授されることに。

伝授者の加治織部正(先代藩主の末弟で元首席家老)は「ゆつくりと秘剣村雨の一ノ型に構えた。(中略)織部正の右手の木剣は八双の位置で天を指していたが、左腕は軽く前方にのびて何かの舞の型に見えた。」この「何かの舞の型に」とは多分、東南アジアの上座部仏教やブツダ自身の教えがルーツといわれる精神集中の実践としての瞑想訓練法で、ヨーガや禅につながる瞑想の秘伝「手動瞑想・歩行瞑想」由来の武道における心身統一の法であるう。「みち文道・経書」も「ひそ秘剣」も、東洋的・日本的な一つの完成された「知」の修得に繋がるもの。後日、この伝授された秘剣の「受けの太刀」で文四郎はお福さまが襲撃された事件と自身が刺客に襲われた事件の二度、間一髪の窮地を切り抜けることが出来たのであつた。

文四郎とふくの幼なじみが組屋敷で別れてから、通称文四郎が郡奉行牧助左衛門となり、ふくが城奥の支配者お福さまになるまでの間の二人の人生は生命がけのものであつた。

それはまさしくブツダの教え通り「生きていく以上、避けられない苦」「八苦」であつ

た。就中「愛別離苦(愛する人、好きな人とはいつか別れが待っている)」「怨憎会苦(嫌なこと、嫌いな人とも顔を合わせる)」であった。

そして、時は流れて二十余年、さきの藩主が病死し、一周忌を前に髪をおろし、尼になると決意したお福さまと助左衛門の久々の再会。「次々と押し寄せる切ない記憶に後押しされ、二人は長い間秘めていた思いを遂げる」。お福の「ありがとう文四郎さん。これで、思い残すことはありません」という最後の言葉。「蟬しぐれが助左衛門をつつんで来た」。

この結末、この文章は、構成力・文章力抜群の作家藤沢周平以外出来ない離れ技というしか言葉がない清らかな仕上がりで、これがいつまでも読み継がれる鍵であるといつて間違いないであろう。

附(つけたり)

蛇足ながら、この清らかな結末の作品『蟬しぐれ』の「読みこたえ」の因つて来る所以を独断と偏見で付記すると

藤沢が逆境の中で、本人が意識したかしないかにかかわらず体得した人生観に因るものである。

まず第一は日本民族の形成以来、その風土の中で歴史的年月を経て醸成された「所産」である民族の智の世界「かなながら・神の道」具現すれば「自然」更に判り易く表現すれば自然の所産である日本的「人情と義理」の世界観である。

次は同様な各々の民族の、そして各々の風土の所産、中国二千年の精神史である「経書」中んずく「儒教(学)」・「道德」・「人のふみ行うべき道」である。

また同じく東洋的な智、インドで生まれ、アジアに広まった「仏教(道)」・「智慧(般若)と慈悲」。

藤沢周平の『蟬しぐれ』は東洋の宗教性が色濃い人生小説であった。「再読に思う」である。

〈主なる参考・引用文献〉

『蟬しぐれ』藤沢周平、文春文庫

『風の果て・上下』藤沢周平、文春文庫

『三屋清左衛門残日録』藤沢周平、文春文庫

『密謀・上下』藤沢周平、新潮文庫

『義民が駆ける』藤沢周平、講談社文庫

『直江兼続』童門冬二、集英社文庫

『藤沢周平の本』別冊宝島編集部編

『藤沢周平の世界・蟬しぐれ』朝日新聞社

『藤沢周平の世界・藤沢周平の魅力』朝日新聞社

新聞社

『トランベール・藤沢周平「蟬しぐれ」を旅する』(2005・10)

『和英対照仏教聖典』仏教伝道協会

『図解日本仏教と宗派』宝島社

『プレジデント・仏教伝来』(1990・11)

『古典百名山』大澤真幸が読む 西田幾多郎

『善の研究』(朝日新聞社 29・12・17)

出雲大社再考 (一七)

空中神殿の謎 (1)

巨大柱出土と金輪造営図

村上 邦治

出雲大社最大の謎は、社伝に本殿の高さを「上古三二丈(九六^尺)、中古一六丈(四八^尺)、その後八丈(二四^尺現本殿)」と伝えるが、はたして真実なのかということである。さすがに一〇〇^尺近い木造建築は、現代の技術でも不可能と大林組では断定している。問題は戦前より論争が続いている中古(奈良、平安期)に、五〇^尺近い神殿が存在したかである。

平成一二年四月末各紙一面大見出しで、過って出雲大社で、「高層本殿」「巨大神殿」「天空神殿」が実在したと報じた。これは大社町教育委員会が『巨大な本殿跡を発見』とする「幅六^尺と四^尺の柱穴を発掘、この柱穴には一・三五^尺の柱三本を一本に束ねた直径三^尺柱の根本部分が遺存しており、平安時代末頃の巨大な本殿跡の一部と判断した」との発表に基づくものである。千家国造家に伝わる巨大本殿の平面図「金輪造営図」の柱構そのものであるとし、「大規模本殿が実際に存在していたことが明らかになった」と付け加えた。

この発表には、高さには一切触れていないが、出土土師器から「平安期」(社伝の中世)のもの、偽図との説もあつた「金輪造営図」と同じ三本の柱を金輪で束ねた巨大柱の発掘、二つの柱跡から「本殿幅は一七^尺(現本殿一一・六^尺)」とみられる、とあれば高層神殿の実在は間違いない、として報道したのである。

「金輪造営図」は一八世紀末千家俊信が本居宣長に入門した時、千家家に伝わるものとして、本居宣長にみせ、宣長の『玉勝間』で、高層神殿の証拠として紹介された。三本の大木を金輪で束ねて正殿を支え、引橋の階段の長さは一町(二〇九^尺)と記され、社伝の上古三二丈、中古一六丈の本殿がこの図により実在した証拠とされ流布されたのである。発掘される十年前から、一六丈の本殿復元を建築専門家の立場から調査分析し、百分の一の模型とその検討過程を纏め出版した大林組は、この発掘を手放しで喜び、歴史的に証明されたとして、二か月後増補版を出し、建築大手としての実力を誇示したのであつた。

その後四年をかけて科学的な建造年代の調査がされた。土師質土器は出雲地域編年に照らし、一二世紀後半から一三世紀代とされた。

炭素14による年代測定は国立歴史博に依頼、大穴の心御柱は一一九七〜一二二五年、宇豆柱は一二一五〜四〇年とされた。柱直下

から出土した木の葉は同じ測定法で名古屋大に依頼、一二四二〜八〇年の可能性大とされた。また年輪年代測定を奈良文化財研究所へ依頼、残存最外年輪は一二二七年と確定された。

これら年代から「鎌倉期宝治二年(一二四八)正殿式遷宮時の本殿跡」と判断された。この結果、期待された発掘当初の平安期Ⅱ金輪造営図Ⅱ高層神殿(一六丈)は否定され、八丈の高さ(正殿方式)の遺構であつた。

すでに鎌倉期では、当地は「たたら」が盛んで大木を得ることは難しくなつていたのであろう。永久二年(一一一四)造営は「寄木の造営」と呼ばれ、大木百本が海上から寄せ、それで造営したとする言い伝えがあるが、他国から調達したことを暗示しているものと思われる。その為八丈の本殿を建立するのさえ、金輪を使用し、八丈の高さを維持していたものと思われる。行橋(階段)一町も一二世紀末の作成絵図「出雲大社神郷図」には描かれていない。一町というと境内を占拠してしまう長さであり、誇張であろう。

結局大発見と報道された遺構は、空中本殿ではなかった。謎は残されたままである。

(この項つづく)

参考文献

『出雲大社の建築考古学』浅川滋男 同成社
『古代出雲大社の復元』大林組 学生社